
Gray

紅乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gray

【Nコード】

N2882B

【作者名】

紅乃

【あらすじ】

属性を体现する髪の色にしてはありえない灰色をもつ主人公。自分と同じ色の髪を持つ少女と出会って青年は大きく変わる。「選択して。闇か光か。私達にはそれしか生きる術がないのだから」

gray story. 0—00 追憶

天窓から太陽の光が差し込んだのどかな雰囲気の部屋。

そこで、少年と青年がむかいあってイスに座り、紅茶を飲んでいた。少年のほうは灰色の髪と双眸そうぼうを持ち、青年のほうは銀色の髪と双眸、長く上がった耳とおそろしく整った顔立ちは、人間とは異なる者だということを見る者に一目で知らせた。

「兄さん、ぼくの名前はなんではいろなの？」

唐突に、まだ呂律ろれつのまわらない舌で小さな少年が話す。

その少年の一言に、青年は軽く目を見開きしばらく考えるようなそぶりを見せた後、目を細めて微笑した。

「はいろの字、なんて書くか知ってる？」

少年は首をかしげると言った。

「灰色って書いてはいろ」

少年は立ち上がって空気に【灰色】と漢字で書く。

青年も立ち上がる。ひざを曲げて少年の頭に手をのせ、わしゃわしゃとかきまわした。

「そうだよ。灰色のお母さんとお父さんがつけてくれた、大切な名前だ」

「？」

見上げた先の青年は、ただ笑うだけだった。

gray story. 1-01 靡(なび)く灰色

いつもよりはやく起床して、彼は身支度を始めた。

洗面台にむかい、顔を洗う。鏡に映るのは15歳になる青年の顔。

灰色の髪に同色の瞳の幼さが少し残る、整った顔立ちだ。

冴えてきた頭で、着替えをすると、彼は少し嬉しそうに階段を下りた。

今日は彼の通う魔法学校の5年目の始業式だった。

「おはよう、はいろ」

「おはよう、兄さん」

灰色は兄の挨拶に答え、テーブルにつく。テーブルの上には朝食が並べられ、彼の兄はラフな格好で紅茶を飲んでいた。

銀色の髪に銀色の双眸。長くとがった耳におそろしく整った顔。多少のびた髪を後ろで一つにくくってはいるものの、灰色が彼と出会った10年前から、彼は全く年をとっていないように見える。いつも通りの幸せをかみ締めながら、灰色は席についた。

「今日は始業式だったよね」

「うん、今年もたぶんチョーカーになると思う」

彼は兄にそういうと残った準備を始めた。慣れた様子でシャツの上に灰色のローブを羽織る。

「いってきます」

「いつてらっしゃい」

兄に挨拶をすると、灰色は家を出た。

上機嫌な灰色を待っていたのは、閉まった学校の門だった。

「あ……れ？」

驚いて灰色は自分の腕時計を見た。始業式45分前。時刻は問題ない。ならば何故なのだろうか。

「……まあいいか。SHRにでもいいよね」

初日からサボりを決行しようとした彼は、再び歩きだそうとした。しかし、そこに突然視認できない風の刃が襲い、灰色はそこから飛び退った。

「チッ。よけるなよ」

背後から不機嫌そうな低い声が聞こえてきたが、振り向く間もなく無数の風の刃が彼を襲う。全てをかわしたものの、あたりには砂煙がたち、視界が悪くなった。

「これで顔がばれないな……ハッ！」

灰色は声が聞こえてきた方向に無詠唱で簡単な魔力の衝撃波を放ったが、既に敵の姿はそこにはおらず、かわりに真横から無数の刃が

とんできた。

（砂が目に入って痛い…）

場違いな事を考えると、灰色は風の魔法の詠唱を始めた。

「風よ、風よ、風よ！ 乞うは北風。全てを吹き飛ばせ！」

彼の言葉に風は答え、勢いを強くする。その風に翻弄され、砂はあつという間にとんでいった。

そして。そこから現れたのは、予想に反して灰色と同じ制服を着た青年だった。薄黄色の切れ長の目と、肩より少し上で揃えた髪をした、すっきりした顔立ち。

その顔は、幾度か見た事のあるものだった。

「……生徒会長っ！」

灰色が愕然とその名称を言うと、

彼、――生徒会長、ウィル・ケイナスは唇を歪めると、その場から消えた。

「……まさかあの生徒会長が？」

灰色の記憶する限り、彼は好戦的な性格でもないし、あんな笑い方もしない。生徒会長になるだけあって、たくさんの生徒から慕われるような人柄だった。

「……あっ！ 二重人格とか？ ……ないかってあれ？」

学校のほうに向き直ると、閉まっていたはずの門が開いていたのだ。生徒もちらほらと見える。

誰も気づかなかったのだろうか。

腕時計を見ると、時間は経過し、始業式30分前になっていた。少し悩んだものの、やはり遅刻はしたくないので灰色は歩きだした。

gray story. 1-02 煌く銀色

「顔見たよな、あいつ」

その声からは焦りは感じ取れず、あるのは狂気と奇妙な喜びだけ。彼はくつくつと笑うと、左耳についている銀色の宝石の嵌ったピアスに触れると、目を伏せた。

「願うは五界の混沌と狂乱。全てを浄化、洗礼し消滅させん」

その呪詛めいた言葉は、されど聖なる響きを持って成された。

先ほどあったことを綺麗さっぱりと忘れながら、灰色はわかりきっているクラス表を見に行った。
クラスは4つ。

「チョーカー」

「イヤリング」

「ブレスレット」

「リング」

それぞれそのクラスの者はそのアクセサリーを身につけている。そして、体の上のほうにつけるもの程、上とされる。しかし、「チョ

「カー」の意味は首輪なので、問題児クラスという意味だ、ととる者も少なくない。実際、まともな人は少なかったりする。

「あ、灰色。お久しぶりですわね」

クラス表を覗いている灰色に声をかけてきたのは、「まともではない人」の中の一人だった。

彼女の名は鎖野皐月^{くさりのさつき}。彼女は「魔法七貴族」のうちの鎖野家の長女だったりする。

※魔法七貴族 七つある魔法系統をそれぞれ極め、血筋、品性、実力ともにトップをいただく一家の事。色々と優遇されるし、滅多な事がないかぎり、その地位が揺らぐことはない。

女子にしては少し高めの身長に、艶のあるセミロングの緑の髪。知的な光をたたえた深い青の瞳。ローブは着ておらず、ベストとシャツ、スカート、という一般的な制服を着ている。

そして、彼女はその綺麗な顔に笑みをのせていた。

「今年も貴方はチョーカーですわよ？」

その言葉に灰色はがくつと肩を下ろすとため息を吐く。

「やっぱり……？ 僕のどこが問題児って言うんだろう……」

その言葉に、皐月は僅^{わず}かに顔を顰めた。

「まだそんなことをおっしゃってますの？ 私たちのクラスは最上位に位置する優秀なクラスであって問題児クラスではありませんわ。

……さあ、行きましょう」

それだけ言うと、皐月はさっさと歩きだした。

gray story. 1-03 射抜く青

わざわざ始業式のために魔法で創^{つく}られたその空間は、全校生徒を収容するだけあって広いそのなかには、幾つものパイプ椅子が並べられていた。

ばらばらに。

始業式恒例の行事、「椅子とりゲーム」

別に椅子が幾人か分だけ抜かれている訳ではない。むしろ余分に置かれている。

ただし、「はずれ」をまじえて。

その「はずれ」には、なぜか校長自ら魔法をかけている。それも本気で。

当然、本気の魔法など見抜けるわけもなく、大体の生徒達は次々と引っ掛かっかていく。

「衣装変化」、「異常成長」、「呪詛」など種類は実に様々。

唯一逃れる方法は座らないこと。なので、数年の間にチャレンジャー精神を燃やし尽くしてしまった上級生などは立つ気満々でいる。

「灰色、どうします？ 私は立ちますけど」

答えなど知った顔で、皐月は灰色に問うた。

「僕だって立つよ。いやー、若いっていいね」

そう言って灰色は四苦八苦する下級生を見やる。そんな彼を見た皐

月も意地悪く笑う。

「まあ、若さの至りというものですわ。……本当に見ていて面白い」

「全くだね」

あははははは……と彼らは笑う。ただし、上級生の中には笑っている奴なんてたくさんいるし、自ら進んで笑いものになろうという者もいる。

過去のトラウマが発生して妙に深刻な顔をしている奴らもいるが。

そして。

そんな上級生の中でも一際目立つ二人がいた。

その二人は、哀れな下級生を一人は左手で、一人は右手で指差し、もう一方の片手でお腹をおさえて盛大な笑い声をあげていた。

見事にはもらせて。その二人の過度の笑いからくる苦痛に歪む顔は遠目から見てもわかるくらいそっくりだった。

一人をレイウイリ阿斯・シン・リサタルト。

一卵性双生児の兄である。

もう一人をアルファレナ・リサタルト。

一卵性双生児の妹で、女であるにもかかわらず兄と全く同じ格好をしている。

男にしては長め、けれど女にしては短めというなんとも微妙な長さの金髪に、同色の瞳。どこか気品を漂わせる仕草に、中世的な整った顔といかにも貴族です、という服装の彼らは、実際、魔法七貴族の一つ、リサタルト家の跡取りだった。

そして彼らは今も下級生にむかって聞こえよがしにこう言っていた。

「うわ、何あれ見た、アル？」

「見たよ。あ、あれ見てレイ！馬鹿みたい」

そんな彼らは日々恨みを買っていたりしている。

「あ、あそこの……あ、灰色じゃん」

「本当だ。……レイ、皐月もいる」

「げ。最悪」

笑ったり顔を顰めたりとかなり感情豊か。言っている間も駆け寄ってきていたので、彼らは既に灰色たちの目の前まで来ていた。

「あら、双子ですわね。ごきげんよう？ああ、朝からその派手で下品な金色が目には毒ですわ」

満面の笑みながらも、確実に毒を含むその言葉。

「元気だよ？そういう皐月こそ青と緑なんて毒々しいね」

「典型的な毒薬の色みたい」

「あはははは」

「あはははは」

すこし子供っぽい、意地悪げな笑み。対して皐月は黒い微笑を浮か

べる。

「緑は目に優しい色ですよ？」

「そうなんだ？」

「あはははは」

「うふふふふ」

何度も見てきた光景に灰色はため息をついた。双子と皐月は仲が悪い。幼馴染だからなのか、同じ七貴族だからなのかはよくわからないが本当に仲が悪い。誰かが仲裁をしないといつのまにか周りが壊滅状態になる。

先程から彼らは何故か笑い声の大きさを競っているようで、その異様な様にいつのまにか周りの生徒達は押し黙り、三人の笑い声だけが大きな空間に木霊していた。

「アル、レイ、皐月。そろそろやめないと始ま『そこの三人、静かに』」

スピーカーを通して大きく聞こえるその声は、生徒会長のものだった。

灰色の脳裏に今朝の情景が浮かぶ。壇上にたつ彼の表情は凛々しく、女子は頬を染め、男子は憧れの眼差しをおくる。彼は慕われている。それは揺るぎないものだ。

「……気のせいかな？」

それでも疑念が消えず、生徒会長を見て眉をやや寄せる彼を、皐月

が冷ややかな目で見ていた。

改定中。

side ???

「隠れていないで出てきたら？」

「気づかれましたか」

当たり前。

「接触するの？あの子と」

心配…？いや、違うな。のがれただけだ。

「ノーコメントです、コントラクト。貴方には感謝していますが、所詮貴方は他人です」

「痛いところをつくね…」

「古傷に触ったのなら謝ります。私も焦っているのです」

そんな痛々しい顔をしていたのだろうか。自分は。

「フフ…。不思議そうな顔をしていますね。顔にはでていませんよ。安心してください」

この子はまるで全てを知り尽くしているような物言いをするので苦手だ。あの人そっくりで。

「母さまのことですか？私はあんなたぬきと一緒にされるのは不快で仕方がないのですが」

顔を不愉快で歪ませるところは年頃の女の子なのだが。

「失礼ですね。私は健全なる女子高生ですよ」

「ごめんね…ってあれ？」

何故会話がつながる。心の中で思ったただけなのに。

「フフフ…。そこはノーコメントで」

怖い。ただならぬ恐怖を感じる。

「あ、そういえば用件に戻りますが、天界から降りてきたばかりで住む場所がないのでこちらへ住み込みますので。よろしく」

「どうせ断れないよね…」

「もちろん」

「……………」

「どうだったの？」

急に黙り込まれると怖い。

「今日は入学式でした…」

やってしまったとばかりの顔。
ん？

「入学式…？」

「ではここで失礼させていただきます」

そう言うといきなり消えてしまった。

入学式…？あの子の言ってる学校も今日が入学式だった気がする。
まさか…？

「ッ！！」

仲間の気配がする。はいろの学校のほうから。

「まだいたんだ…」

安心感と絶望感。

ああ、たとえば血のつながっていない兄弟でも、願うよ、君の幸せを。
はいろ…

たとえばこれが僕の勝手な罪滅ぼしでも。

gray story. 1-05 呼応する指輪（前書き）

不定期連載ですみません。

gray story. 1-05 呼応する指輪

「…まだ抵抗するのですか？」

突然目の前の風紀委員が苛々しげに呟いた。

「でるなっ！…ハア…：やっとおさまった…

そこの三人、早く門をくぐりなさい。入学式が始まりますよ！」

急に一人芝居を始めた風紀委員。

そこへ風で彼のしていたフードが脱げ、汗の流れた端正な顔立ちが露になった。

肩より少し上の位置で、毛先がまっすぐ揃えられた薄い黄色の髪と、同色の瞳。

切れ長の瞳にすっと通った鼻筋、薄い唇が、どこか知的な雰囲気を出していた。

「…むう。なんか納得いかないなあ…ここから戦いにつなげようよ」

「…むう。なんか納得いかないなあ…ここから戦いにつなげようよ」

双子が不満たらたらに言った。

「まあいいじゃないか。穏便にことが進んで」

微笑みながら言ったが、双子にとってはそれが炎をつける一言だったようだ。

「…これから僕達不機嫌モードになるから」

「あとよろしく」

につこり満面の笑顔になった後、一気に顔から表情を消し、眉間に皺を寄せ口をへの字にして腕を組む。

顔が端正なせいか、はたまた双子だからなのか、迫力があって面白い。

あとよろしく？自分達のことじゃないのか。

「…」

「…」

それきり双子は黙り込み、歩き出したかと思うと、そのまま門をくぐっていつてしまった。

「あ！風紀委員さん、迷惑をかけてすいませんでした」

沈黙している風紀委員の目がさつきと違ったような…

若干風紀委員から殺気がでてるような気がするような…

無視。人間気付かない方が得！

そう言って少し考えたあと、僕は慌てて駆け出した。

三人が無事門をくぐり終わると、その場に残された彼は、唇を歪ませた。

「久しぶりにでられたよ…さて…」

どこか遠くを見るように目を細め、下をふっと見たあと青年は薄く笑った。

そして、呪文のように目を閉じ、左の人差し指につけられた黄色の宝石のついたシルバリングに口付け言った。

「五界に混沌と狂乱を。闇と死と血による洗礼を」

その言葉に呼応したように、指輪についた宝石は薄く光った。

gray story. 1-05 呼応する指輪（後書き）

方言など入っていたら作者などのほうへ通知していただければ直します。

不機嫌モードは続行中らしく、双子は廊下を我が物顔でずんずんと進んでいった。

廊下で話していたりしていた人たちは、双子が貴族だからか実力者だからか、それとも美形だからかすつと道を譲っていた。

その後ろで歩くのは本当にきまずい。

普段ならこの双子はにこにこしながら廊下を我が物顔で歩いていくのに。

：どっちみち一緒か。

そこに。

「その金髪双子！廊下は公共物です！我が物顔で歩かないでくださいまし！！！」

なんか少し痒くなってくる口調で歩いてきたのは見知った同級生。

彼女は鎖野皐月くさりのさつきという。

彼女も魔法七貴族が一家、ラインを司る鎖野家の息女だ。

いかにもお嬢様、みたいな綺麗な顔に上品な雰囲気。緑のセミシヨートに、フレームの太い眼鏡の奥の青い瞳。

髪と目の色は属性をあらわす。彼女はめずらしくも二属性ドゥエットなのだ。綺麗な顔をしていると思う。

同じ七貴族だからか、双子と彼女は腐れ縁だ。

：ちなみにこの人はこの小説のヒロインじゃないから。違うから。

「…」

「…」

いつもならうざいっ！！とかはもりながら叫んで廊下を走りゆく双子だが、今日は眉間の皺が増え更に大股で歩き出しただけだった。

（だけ…？）

というかもう小走りしないとついていけない。
何故西洋人は足が長いんだろう。

「ちょっと!! 聞いておりますの?」

いつもと違う態度が気に障ったのだろう。

説明をしなければ。

「今日アルとレイ不機嫌モードなんだって」

そういうと彼女は合点がいったように頷き、いかにもお嬢様という
感じに優雅に、腕を組んで歩きながら言った。

「ああ!! さては戦闘を途中で止められたのですわね? 昔はよくなりましたたわ。尻拭いをさせられるこちらの身にもなって頂きたいものですわ!」

にこりと微笑みながら彼女は言った。

かわいいそうに。少し彼女に同情…を抱いたのは一瞬だった。

「でも面白かったですわ!! 顔に油性ペンで落書きをしても眉間の皺が増えるだけですの! あははははは…!!!!」

最後のほうはもうお嬢様らしい笑いではなく高笑い。

魔女のような。

それにさっきから双子が立ち止まって振り返り、こっちを睨んでる。
皐月はそちらを真正面から見返して言った。

「感謝してほしいくらいですわ! 未来永劫とけない呪いでもかけようかとおもいましたもの!」
そういつてまた高笑い。

「…灰色、行くよ」

「…灰色、行くよ」

「ああ、うん」

不機嫌モードが直った(?)

「お待ちになって！私も^{わたくし}行きますわ！」
にここに。にここに。

三者の間に火花が散る。

はたから見れば仲むつまじきことだが、僕の身にもなってほしい。
それはこれからの言い争いからわかる。

gray story. 1-07 ニヒルに笑え

以下、喧嘩(?) 内容。※三人は終始笑顔です。

「なんでキミがついてくるのさ」

「なんでキミがついてくるのさ」

「あら、ついてきてはいけませんの?」

「邪魔なんだよね邪魔。もう視界にも入れたくないくらい」

「邪魔なんだよね邪魔。もう視界にも入れたくないくらい」

「あら、失礼ではありませんこと? レディーにむかって」

「キミ性別女だったの? 初耳」

「キミ性別女だったの? 初耳」

「あら、失礼ですわねこのヤンキー双子」

「うるさいこの高飛車女」

「うるさいこの高飛車女」

「あら、女と認めてくださったの? この自己中双子」

「だいたい邪魔なんだよ僕らが楽しく灰色と登校してたのに」

「全くそうだよレイ」

「ねえアル」

「あはははははは」

「あはははははは」

「ちょっと！人のものに勝手に手を出さないで下さいまし！」

「は？誰が誰のものなのさ」

「は？誰が誰のものなのさ」

「灰色に決まってるじゃありませんか！」

「ちょっと！灰色は僕らの大事な玩具おもちゃなんだから！」

「ちょっと！灰色は僕らの大事な玩具おもちゃなんだから！」

「違いますわ！私の玩具です！」

………いかげん怒ろうかな☆

はっ！！キャラが崩壊してきた！！

僕は唯一の突っ込み役なのに。

そうだよ。

どうせ途中まで期待したさ。

三人は喧嘩をしていたのに、いつのまにか話題を変えていた。

「ええ、そのときの灰色の顔ったら！うふふふ」

「いいなあ。今度やってみよ」

「いいなあ。今度やってみよ」

…何の話だおい。

しばらく互いが変な自慢をして今度やろ、という会話をしていたのだが、皐月が突如こちらに話を振ってきた。

「それよりいいんですの？入学式はでれませんでしたけど、一時間目がありますのに。…あら。いつのまにか私達以外誰も廊下にいませんわね」

わざとらしく。

それを聞いて青ざめた灰色の顔を見て、三人はニヒルに微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2882b/>

Gray

2010年11月17日07時18分発行